

「復活による自由の約束」

マルコによる福音書 12章 1－12節

森島 牧人 牧師

今日与えられた聖書は、中学生の私を苦しめた箇所の一つです。エルサレムの神殿の境内で祭司長、律法学者、長老たちと権威についての問答をされた主イエスは、続けて彼らにたとえ話をされます。立派なぶどう園を造りそれを農夫たちに貸して旅に出た主人が、収穫の時を迎えてぶどう園の所有者である自身の取り分を受け取るため僕を農夫の所へ遣わしますが、農夫らはその僕を袋叩きにして何も持たせずに帰します。主人は繰り返し僕を送りますが、農夫らはその都度僕を殴ったり、侮辱したり、殺したりして主人は目的を果たすことが出来ません。ついに主人は最後の手段として自分の愛する一人息子を遣わしますが、農夫らはこの一人息子さえも捕まえて殺し、放り出したのです。主イエスはここで「怒った主人は戻って来て農夫らを殺し、ぶどう園を他の人たちに与えるにちがいない。」と言われて、たとえ話を結ばれます（マルコ 12：1－9）。

このたとえ話は神と人間の関係を表していて、すべてのものは神のものであるのですが、神からの取り立てがないと、人間は宇宙のすべてを、自分たちのものと思い違いをしてしまいます。それを防ぐため神は、人間に神の主権を確認させる使いとして預言者を送られました。イスラエルの歴史を見ると、多くの預言者が迫害されながら、「神に栄光を帰せよ。」と叫びつつ殉教しています。しかし、ここで大切なのは、この問題は遠い過去のものではなく、今日の私たちの、さらにはこの世が終わるまでの重要な問題であると聖書が言っていることです。それ故このたとえ話は、私たちにとって心騒ぐ恐ろしい話の一つであると言えるでしょう。

日常の中で取り立て人、借金取りと聞くと思わず身を固くしますが、しかしこの場合の取り立て人である僕を受け入れることは、主権を神にお返しし、人間本来の在り方に戻ることです。従って神から派遣された僕の役割は、神に造られた人間は神のものであることを、人間に再確認させることにあります。その点から言えば、取り立て人との交わりは、自身の存在の根拠が確かな土台の上にあることを確認する喜びの時となるはずなのですが、イスラエルの中心にいた人物たちはそれに気づかず、多くの預言者を殺してしまっただけです。

さらにここで気になるのは、このたとえ話が語られた時と場所の不吉とも言える異常さです。これは受難週の日曜日のことで、主イエスの十字架の死は金曜日に迫っていました。緊迫感が増す主の周辺、主イエスの出来事が主と世界に対する神の啓示であり、神と人間との間の「聖なる不思議な出来事」であることを、この時と場所は示しています。不穏な空気の中、主イエスはこれから起こることの意味を、比喩として語られたのです。

私の神学大学の恩師である北森嘉藏がよく言われた渦巻きの思考によって、少し深く入って行きたいと思うのですが、このたとえ話の聞き手が最高法院の議員たちであったこと、語られた場所がエルサレムの神殿であったことが、主イエスを殺すという気運を決定的なものにしたと思われるのです。何故なら、十字架にかけられた主イエスによって示されることになる神と人との関係の意味が、ここで最も象徴的に語られているからです。ここで私たちが考えなければならないテーマとは、神と人間の関係が何故このような虐殺事件に例えられなければならないか、主イエスの出来事の本当の意味は何処にあるかです。

神と人間の関係は良い悪いの倫理的な価値の上にあるのではなく、独特で「不思議な現実」の上であり、その現実立ってこのたとえ話を見ると、そこには全く別のものが立ち現れて来るのです。神を殺さなければならない存在としての人間と、その人間を殺さなければならない存在としての神がいて、その両者の存在が現実になったのが十字架の出来事であり、さらにその向こうに復活が見えて来るのです。

問題はこのたとえ話の主イエスの結びの言葉、「さて、このぶどう園の主人は、どうするだろうか。戻って来て農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるに違いない。」にあります。この場面はイスラエルの指導者に当てて言われていますが、内容的にはこれはすべての人間にあてはまるものであり、具体的な状況を通して本来あるべきはずの普遍的な真理が、その罪の上にこそ語られているはずだと考えるからです。つまり聖書の秘密は十字架だけを見るのではなく、復活の光から十字架を見ることでなければ明かされることはないということです。この視点に立って受難週から復活・イースターへと聖書を読みながら歩んで行きましょう。

(説教要約 羽入田悦子)